

あとがき

この度、労協・ワーカーズコープとして菜の花プロジェクトについてのテキストを作成しました。このプロジェクトに取り組むにあたっての基本的な事項について記載しております。

最後に、『「菜の花が世界を救う」を合言葉に夢をたくして』の一文をそえます。この文章は今年の夏に成田での菜の花プロジェクト・バイオマス事業について「事業計画」をとりまとめる折に書いたものです。あとがきとしてこの文章をそえます。皆さんの取り組みに本書が参考になり、前進することをねがっております。

2011年2月21日

日本労働者協同組合連合会(ワーカーズコープ) 常任理事 富田 孝好

「菜の花が世界を救う」を合言葉に夢をたくして

「不都合な真実」は消えてきているか

「私たちが直面している気候の危機は、ときにはゆっくり起こっているようにおもえるかもしれない。しかし、実際にはものすごい速さで起こっている。これほど明らかな警告がわたしたちの指導者たちの耳に届いていないように見受けられるのは、なぜなのだろうか?それを認めた瞬間に、道義的に行動をおこさねばならなくなることを知っているがために、警告を無視するほうが都合がよいから、というだけなのだろうか?そうなのかもしれない。しかし、だからといって、不都合な真実が消え去るわけではない。放っておけば、ますます重大になるのである—アル・ゴア」(2006年「不都合な真実」)

労協・協同組合の時代がきているぞ

リーマンショックや世界的経済危機の広がりの中で、協同組合のシステムを、競争原理が支配する資本主義に代わる経済システムとして評価し、それへの転換を期待する声が高まってきています。「競争」ではなく「協同」による経済システムが究極的には、地域社会をよりよい社会へと発展させていくのではないかという認識はかなりの広がりを見せてきています。

一方、今、私たち人類を取り巻いている危機は、

単なる経済危機ではありません。地球環境の危機や地域社会の崩壊・人間社会のつながりの危機などあらゆる分野で現在のシステムにひずみや矛盾が拡大しています。私たちは、この間の実践のなかで協同組合そして、労協・ワーカーズコープがこれらの問題の解決の一助になるのではないかと確信を手にしてきました。

「菜の花が世界を救う」を合言葉に

この地球的な規模の危機の源は、利潤追求一本やりの独占的な資本主義経済システムにあることはまちがいないでしょう。ですから経済システムが協同組合的に変革されていけば、地球環境の問題をはじめ民族間の対立など「戦争と平和」の課題などで人類が抱える重要問題の解決の糸口をたぐりよせることができることとなるでしょう。

「菜の花が世界を救う」は、私たちが菜の花プロジェクトに込めた思いあらず合言葉としたいと思います。そして、この言葉には夢があります。この取り組みには、地域社会からの「信頼」と「連帯」が必要となります。そして、新しい事業への挑戦です。食・農・環境での社会連帯・社会的経済システムの構築をかけての挑戦です…われわれは今壮大な夢とロマンをかけて挑戦する…この計画の実践を!

2010年8月

この計画の策定にあたって

第1章 菜の花プロジェクトがめざすもの

1) ソーシャル・エコ・ファーム運動

日本労働者協同組合連合会 顧問 古谷 直道

1)活動の特徴

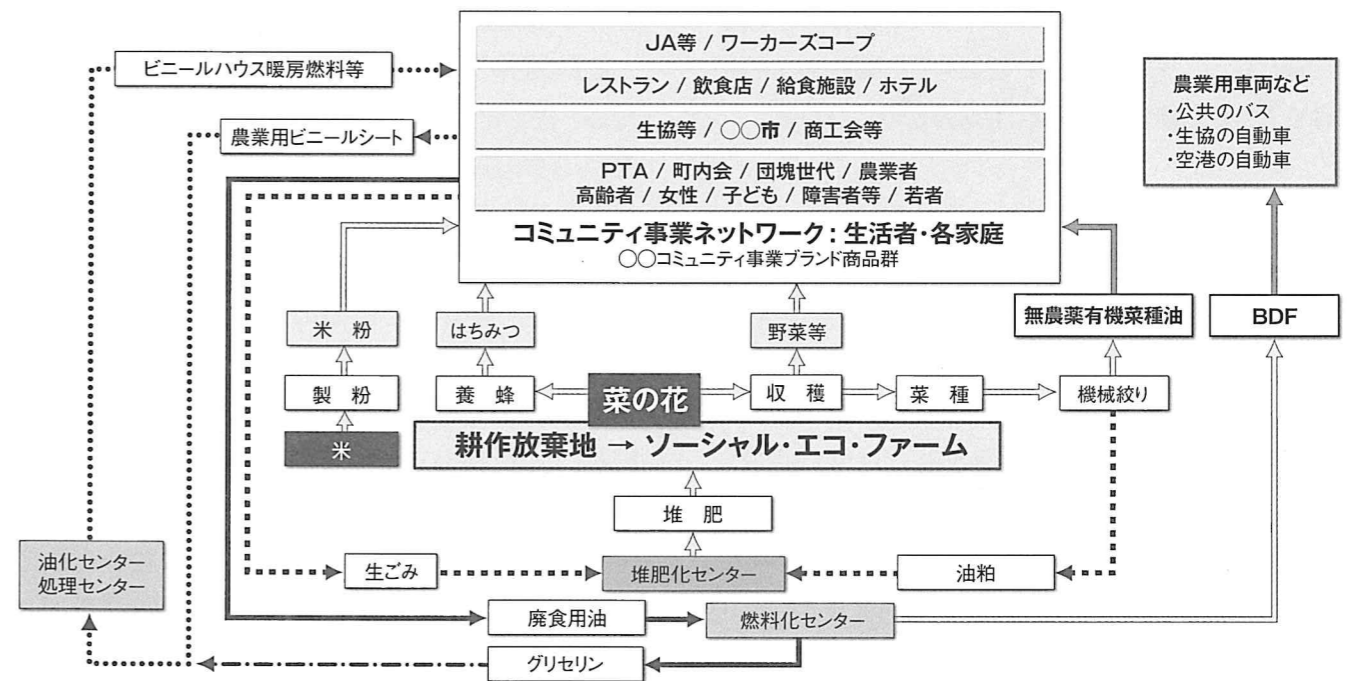
菜の花プロジェクトには、二つの中心活動があります。一つは、秋に遊休農地に菜種を播き、春には菜の花畑の景観を楽しみ、初夏には菜種を収穫して自然の恵みとしての菜種油を絞って販売します。もう一つは、廃食用油を回収し、これを精製処理してバイオディーゼル燃料を作り、街中での自動車や農地での農機具を動かします。そしてこの二つの中心活動は互いに循環的につながってサイクルをなしているのが、菜の花プロジェクト活動の最大の特徴です。

その上この循環サイクルが、そのサイクルのあちこちで、さまざまな新しい活動を自然な形で生

み出す構造になっているところにも注目する必要があります。

たとえば、遊休農地の菜種を収穫した後、そのまま次の年の菜の花の種を播いても、連作障害のためによく実りません。そこで、菜の花以外の有用植物を栽培しその収穫の後で次の菜の花を植えましょう、ということになります。菜の花まつりに参加した子どもたちと母親、若者や障害者や高齢者たちも、この親しみを持った農地での新しい農業に自然な形で参加するようになります。

このような多様な活動が、自然な形でどんどん発芽してくる特徴に留意し、より積極的に多様な活動を見つけ出し、育てていこうとする活動を『ソーシャル・エコ・ファーム運動』と名づけます。



## 2 多様な主体とさまざまな展開可能性

「さまざまな活動」は、「多様な主体者」をつなぎ、人と人の絆のネットワークを形成します。そこには、協同労働の協同組合であるワーカーズコープやワーカーズコレクティブ、生協・JA・漁協・森林組合・高齢協などの協同組合、環境や福祉や街づくりに取り組むNPO、そして地域の高齢者・障害者・若者・子どもたちと女性たちをはじめとする市民が登場します。

関係する行政も環境(バイオマス対策・廃棄物リサイクル・景観)から農林水産(耕作放棄地・食糧・里山里地の保全)・厚生労働(子育て・若者・障害者・高齢者の自立就労支援、生活保護から介護福祉まで)そしてそれぞれの地域の地方行政まで、縦割り行政の壁をすべて包み込むような広範な領域で、このソーシャル・エコ・ファーム運動は展開されます。

環境(エコ:eco)の取り組みであり、農業(ファーム:farm)への挑戦であり、かつさまざまな不利な状況にある人たちの就労支援を包含する社会連帯と協同労働のソーシャル・ファーム(social-firm)の取り組みでもあります。このように幅広い市民と働く人々の、最も現代的な活動の場面となります。

## 3 目標の設定

このソーシャル・エコ・ファーム運動が、実際に社会的な意味を持つ運動として発展していくためには、取りかかろうとしている課題について、社会的に影響を持ちうるような成果をあげなければなりません。そのためには、10年くらい先を見て、象徴的な社会的課題の1%程度を解消する目標を設定して運動のスタートを切りたいと考えます。

すなわち、耕作放棄地1%の解消(全国40万ha

の1%=4,000ha;埼玉123ha、千葉171haなど)を目標に掲げます。この目標が達成されると、付随する諸課題、たとえば就労困難者のための仕事おこし、あるいは地域に根ざす農業の再生、障害者・高齢者・若者の健康と生きがい作りなどにも大きな成果を挙げるができることでしょう。

## 4 自然のいのちと交わり、人の絆をつなぐ— ところを耕す運動

「菜の花の素晴らしい景観」「美味しい菜種油」「農地が活用された」「新規就農者が立派にやっている」「廃油で町の車が動いている」……このようにソーシャル・エコ・ファーム運動は多様で具体的な成果を期待できる運動です。しかし、なによりもこの運動に期待したいのは、多世代の多様な階層の人々が、日本の自然・里地里山が育むいのちと交わり、人と人が互いに交わり、絆をつなぐ、そのことによって日本社会の協同と連帯が深まり、広がるということです。「菜の花プロジェクト」はまさに「人の心を耕すソーシャル・エコ・ファーム運動」でありたいと考えます。

21世紀初頭のこの時代、ささくれ立ち、孤独に悩み、生きあぐねる人々が、この運動の中で自然のいのちの連鎖に触発され、自らが生き、かつ生かされていることを実感する。そして、自然とのつながり、人との絆をより一層強めるために、自らが自発的・積極的に運動の渦の中に飛び込んでいく。そして失いかけた人々の「働く場」「遊ぶ場」「学ぶ場」や「暮らす場」そして「祈る場」を地域の自然、地域コミュニティの中に再発見していく。そのようないのち溢れる運動を展開しましょう。そのことを通じて社会連帯活動を豊かに育み、生きがいを持って働ける協同労働の事業をも育てていきましょう。

「潮風」という厳しい条件下で菜の花栽培を成功させこと、成功すればどんな土地でも栽培可能になること、環境教育、循環型社会形成に向けた啓蒙活動(住宅街、大学に近い立地)。2008年5月には取り組み内容・成果の紹介や秋田県民のエコ感覚向上と行動につなげるために、秋田港菜の花フェスティバルを開催し2日間合計で13,000人が来場しました。翌年には20,000人が来場しました。菜の花畑をBDFトラクターが走ったり、ステージではイベントをし、コンテナブースやナタネ油を使った料理教室、廃食油でキャンドルを作ったり、菜の花つみとり体験や展望台も作りました。イベント運営は学生スタッフ・ボランティアで行いました。

2010年には由利本荘市に移し、行政や地元企業、学生ボランティアを中心に鳥海高原に会場を移し、菜の花まつりを行っています。2011年も鳥海高原にて菜の花まつりを予定し、2011年2月現在、実行委員会を中心に準備を進めています。

栽培面積拡大や菜の花栽培後の、野菜等農作物の栽培・販売などを行っています。

## \*BDF事業

2003年10月の東京都ディーゼル規制があり、ディーゼル車の走行規制があり、粒子状物質減少装置の装着、低公害車導入が必要になり、対応をすることとなりました。同時に高騰する原油価格、農村経済の危機的状況等に積極的に対処したいという思いから、BDF製造実験に着手(2004年9月に開始)しました。

自社方式で20,000 l/月製造能力(1,100 l/日)を自社のトラック15台に100%BDFを利用(試行錯誤で3台のトラックを犠牲に)しました。冬期間対策(BDFの自動車利用:耐寒性)も行いました。最新式エンジンでのBDF利用を自動車会

社と共同研究(実証試験)し、また樹脂の利用などの新たなBDF精製法を試験中です。

バイオディーゼル燃料精製法~ローテク・ローコスト型製法の開発~ 廃食油→遠心分離器→加熱装置→ろ過器(廃食油から不純物を除去)触媒(KOH)・メタノールを入れ、かくはん機にて化学反応→沈殿槽 上層→BDF(製品)、下層→グリセリン 自然沈降・樹脂フィルター等使用(非水洗式)で行っている。装置不要であり、自製が容易であり、安価であるので、無水洗(水洗・脱水・排水処理なし)にこだわっています。

現在のBDFの品質は特に大きな問題なしで最新式エンジンもきれいな状態で自動車メーカーも驚いています。

BDFの厄介者である粗グリセリンの有効活用としてボイラー助燃剤として用途開発中である。

安易な装置で低コストで作ることで、ゆくゆくは家庭でもできるBDFづくりへと市販プラントを使用しないため、経験と勘が頼りとなる。作ったBDFは自家利用が基本(商品として販売しない)高騰する軽油の代替品として利用する。BDF製造コストは約70円/l うち廃食油購入平均価格10~30円/l。農村活性化へ結びつけるため、BDF製造工程の一部を農家へ委託しています。



▲石田会長自慢のBDF車